日常語のなかで、
歴史的語源や
エピソードを取り上げ、
研究者が専門的視野から
ご紹介します。

日常語のなかの歴史 36

ふうりゅう〈風流〉

風流という言葉は、現在、一般に「ふうりゅう」と読まれる。辞書によれば「ふうりゅう」には、「上品な趣があること。みやびやかなこと。また、そのさま。風雅」「世俗から離れて、詩歌・書画など趣味の道に遊ぶこと」「美しく飾ること。数奇をこらすこと。また、そのさま」などの語義が挙げられている。

一方、同じ字を「ふりゅう」と読む場合、辞書はまず「ふうりゅう」と同様に「上品で優雅なおもむきのあること」を挙げるが、これに続けて「中世芸能の一。華やかな衣装や仮装を身につけて、囃子の伴奏で群舞したもの。のち、華麗な山車の行列や、その周りでの踊りをもいう」という語義を記す。延年舞の演目に「ふりゅう」と呼ばれるものが伝わるのも、その名残であろう。

一五世紀、この「ふりゅう」と呼ばれる風流物が大流行を見せた。「婆娑羅（ばさら）」と呼ばれる、派手で奔放な振る舞いを好む美意識が生み出された室町時代の「風流」は、華麗な造り物や、それを競う視覚的・祝祭的な文化を指すこともあった。伏見宮貞成親王の日記『看聞日記』には、賭け事の会場を飾る装飾や賞品として「風流物」がしばしば登場する。

その一例が、富士山を象った造り物である。大形の伏籠に紙を貼って彩色し、山頂には雪に見立てた綿をかぶせた。麓には高欄付きの橋を架け、橋の上には手斧と鋸を置いたという。この趣向は『古今和歌集』仮名序の一節、「富士の山も煙たたずなり、なにはなるながらの橋もつくるなり」を踏まえたものであろう。かつての繁栄や古い習わしが失われ、世が移り変わってしまったことを嘆きつつ、人々はただ残された「歌」によって昔をしのび、心を慰めるほかない——そう結ばれる序の言葉を、造り物という視覚の形で再現してみせたのである。

私たちは今日、「風流」と聞くと、静かに月を愛でたり、書画を楽しんだりする姿を思い浮かべる。だが、中世の「ふりゅう」から聞こえてくるのは、活気に満ちて賑わう人々の姿である。趣向を競い、賭け事に熱中し、時に人を驚かせる奇抜さに歓声を上げる。そうした華やかで、いささか騒々しい世界もまた、かつては「風流」と呼ばれていたのである。

（石橋健太郎・帝塚山学院大学教授）